出会いへの挑戦

出会いへの挑戦

ジェリー・サンディッジ著

国際聖書通信学院

CHALLENGE TO ENCOUNTER

by

Jerry Sandidge

©1986 All Rights Reserved

International Correspondence Institute
Brussels, Belgium
D/1986/2145/20

EV 4000 - JA

目　次

序言…… 5
著者序文…… 8
第1課：いかにして確実なものを知り得るか…… 15
第2課：神はいるか…… 49
第3課：イエスについて…… 85
第4課：聖書は神の言葉か…… 123
第5課：キリスト教経験は妥当か…… 159

序　言

ICI（国際聖書通信学院）ではこのたび，クリスチャンがいかにして哲学と神学から生じるいくつかの問題に知的にアプローチできるかを知る上で助けになるようなこのコースを用意しました。著者は真理の性格，神の存在，イエス・キリストの主張，聖書の権威を論じています。その際，著者は，キリスト教は理解できるものではあるが，単なる知的同意以上のものである，と提言しています。キリスト教とはイエス・キリストとの出会いであり，イエス・キリストへの明け渡しです。あなたはこのコースを本として読むことも，通信講座として勉強することもできます。ICI の教師は喜んであなたのお手伝いをします。ICI の住所は裏面にのっています。

著者のジェリー・サンディッジは，大学生のために過去８年間働いてきた認承された牧師です。彼は学生のためのキリスト教雑誌を３年間にわたって編集してきました。現在はベルギーのルーベンに居を構えて，学生のための伝道と霊的成長のプログラムである「ユニバーシティ・アクション」の部長として奉仕しています。

サンディッジ氏は米国ミズーリ州，スプリングフィールドのセントラル・バイブル・カレッジで聖書の学士と宗教教育の修士を受けました。またミズーリ州，コロンビアのミズーリ大学からガイダンスとカウンセリングの修士を受けています。つい最近は，神学部より道徳及び宗教科学の修士とベルギー，ルーベンのカトリック大学の哲学科より哲学学士を受けました。現在は，同大学の神学部における宗教研究の博士号を取得するところです。

学課の構成

各学課の構成はみな同じですが，ひとりで勉強しやすいようにこの構成がとられています。気が向くままどんどん読んでいってもかまわないのですが，む

しろ時間をかけて注意深く，またよく考えながら内容をつかんでいくことをおすすめします。

各課の初めに，総論のいくつかを提示する目的で短い序言が出てきます。その次の「考えるための問題」はあなたの思考を刺激するため，また課内の具体的なアプローチを示すためにあります。学課を読み進む上で，これらの問題を念頭におくことは大切なことです。「用語の意味」は学課内で用いられている重要な言葉を理解する助けを与えるものです。そのうちの多くは，すでによく知っている言葉であるかもしれません。しかし，多くの場合は，言葉そのものは良く知っていても，内容的に未知の専門用語が使われています。これらの用語を念頭において本を読み，必要なときはもう一度見返すとよいでしょう。

「学課の展開」は勉強する基本的資料です。それは，できれば１つの勉強の区切りの中で取り扱われるべき区分に分けられています。記されている著者や作品に初めて出会った場合は，脚注や引用で説明されています。聖書の引用は，あとでよく調べてもらうために載せてあります。聖書は，キリスト教についてのコースに共通の重要なテキストです。特別な場合を除いて，聖書は新改訳聖書を使用しています。学課を通してこの聖書があれば勉強の役に立つでしょう。

学課の終わりには，引用した著書のリストをあげたあとで，「今後の勉強のために」というセクションがあります。これは，主題をさらに深く勉強する上で役に立つような本をリストアップしたものです。

次の「自習」セクションは，２つのことをするためにあります。(1)個人的に聖書を研究し，考えるため，(2)各課の主題を聖書と自己の生活に関連づけるためです。

最後に，これは単位を獲得するコースではないので，試験のようなものはあ

りませんが，「自己採点復習」と呼ばれる問題集があります。これは単に学課を組織的に復習するためのものです。内容に関する質問に対する解答は，絶対にというわけではありませんが，できれば「自己採点復習」の最後に出てくる正解を見る前に，書き出してみるとよいでしょう。この問題集には，主題を自己の状況に関連づけさせるための「思考の刺激」がついています。

このコースとは別に，ステューデント・インタラクション（学生の相互作用）という題の小冊子がついています。最初の部分，インタラクションAは全コースの内容を復習するためのものです。どうかこのセクションを完成させてICI事務所まで郵送して下さい。

インタラクションBはコースそのものをあなたに評価してもらうためのもので，コースを修了してもしなくても，コースをどのように受けとめたかをあなたに尋ねるものです。これは私たちにとってとても大切なことですので，コースを勉強し終えたらいつでも，どうか是非ともインタラクションBに関するあなたの意見をICI事務所まで送って下さい。

最後に，インタラクションCはイエス・キリストについてのあなたの立場を記録してもらったり，個人的接触を深めてもらうものです。これもまた，あなたの好きなときに書きこんで下さい。しかし，このセクションを完成する際には，心から完成させたいという願いをもって取り組んで下さい。

このコースは，あなたがどこにいても，自分で勉強できるように作られています。教材について問題か疑問をお持ちなら，そのことをICI事務所まで知らせて下さい。すぐお返事をいたします。また，内容について他の人と話したいと思われるでしょう。このコースは，グループで勉強したり話し合ったりできるように組み立てられていることにお気づきでしょう。しかし，ひとりで勉強するにしても，だれかと一緒に勉強するにしても，あなたはきっとキリスト教信仰の性質と基本を，より良く理解するようになると信じています。

著者序文

「人間の偉大さは考えることにある」(パスカル,『パンセ』346より)。フランスの数学者であり哲学者であるブレーズ・パスカル (1623-1662) のこの言葉は,私たちが人間にアプローチするときには,主に考える存在としての人間を考慮しなければならないことを私たちに想起させてくれます。このコースは考えること,すなわち真理と人生の究極的実在について考えることへの招待です。人は,ちょうど雪片が各々違うように,また木の葉が1枚1枚違う模様をもっているように,各々ユニークな存在であることが,このコースでは考慮されています。人はだれでも自分の個人的な歴史を持ち,自分の人生観と真理と実在の認識をもっています。このコースから人生の意味を知る1つの見方を見る一方,個人的,文化的相違をも考慮されるように願っています。

私はクリスチャンです。これは私が選んだ人生観です。私はあなたとクリスチャンが重視している問題のいくつかを話し合いたいのです。ここでひと言つけ加えさせて頂くと,私は人間が,そう,私の信仰を持っていない人たちでさえも,すべての人が好きです。特に学生たちには特別な親近感を抱いています。過ぐる8年間,私は全時間を大学生と過ごしてきました。彼らは親切で思いやりがありました。無関心や皮肉からではなく,彼らは私が信仰を持っていることを認めています。それでも,彼らのうちの多くはこの信仰を持っていません。これは常にいくつかの理由があります。宗教とか教会は今日大切なものではないと思う者や,彼らが出会ったクリスチャンの挫折を見て興味を失った者もいます。多くの学生は最も偽善を憎んでおり,自分が心から確信を持てないものと同化しようとはしません。

学生であろうとなかろうと,私が書いている相手はこういう人たちなのです。私は,イエス・キリストに心ひかれていながら,今のところ心から,また自覚を持って完全に委ねきれない人にお話ししたいのです。しばしば私の見方

は狭く感じられるでしょうが，いずれにしても真理そのものは狭いものです。なぜなら真理は，真理ならざるものは誤りであり，捨てられるべきであることを主張するからです。この真理は，第1課の主題となっています。

真理は絶対ですが，真理や知恵の理解はそうではありません。たとえそうでも，自分は全知であると言い得る人はひとりもいないし，ひとつの集団でさえもそれは不可能です。ソクラテス（B.C. 469-399）は「ギリシャ最大の賢人」と呼ばれました。彼自身はこの呼び名を疑っていました。そこで彼は，知恵をもっていることで有名なあらゆる人を調べ始めました。その結果，彼らすべてよりも自分が賢いことがわかりました。なぜでしょうか。「なぜならば，彼は少なくとも自分が何も知らないことを知っているが，彼らは自分たちが何も知らないことすら知っていなかったからです」（アームストロング P.27）。

私はソクラテスの知恵をいくらかでも持ちたいと願っています。私もすべての答えを持っているなどと主張しないからです。しかし，第1課で私が試みていることは，真理の問題と真理をいかに確実に知り得るかという問題を取り扱うことです。真理にはユニークな面があります。この点をアウグスチヌス（A.D. 354-430）は言いました。「真理は，どこでそれを見いだそうとも，熱心に受け入れられなければならない」（フリーマントル P.14より引用）。実際，私がこれらの学課を学ぼうとするみなさんにお願いしたいことは，真理を受け入れてほしい，どこでそれを見いだしても，そうしてほしいということだけです。

第2課は，神についてです。さて，「人間理性の極限において，あるいは自然の第1原因として到達し得る神」（フリーマントル P.16）と，人間に関心を持ち，人間の歩みに関わりを持つ現実の神とは大違いです。前者の神観に達するプロセスは哲学の領域です。後者の神観を研究することは神学の分野であって，どちらに応答するかによって，宗教か信仰かに分かれてきます。

ここでは，哲学の信用を失わせるような試みは一切していません。実際は，哲学と神学が同じ科学の要素と考えられていた中世や，それ以前の時代が存在しました[a]。かつては哲学者と神学者は自由に交流しました。しかし何世紀にもわたって，これら2つの領域は，良きにつけ悪しきにつけ，分離されてきました。私は哲学的方法と意味合いを無視しませんが，ここでの私の目的は哲学よりも神学にあります。これはあなたがこの本を勉強する際に，心にとめて頂きたい大切な点です。

キリスト教の核心，中心は，「キリスト」という名前そのものに含まれています。キリスト教の信仰は，その創設者をよく見ることをしないで深く考察することはとても望めません。ですから，イエス・キリストの人格と働きは第3課の主題となっています。それはアン・フリーマントルが要約して言っている通りです。

「キリスト教哲学は実在の性質への知的探求であって，その結果，人間を超越した力の可能な存在を前提として受け入れる。その力の存在は人間存在の対象であり扇動者でもあるし，キリストが言われたように，『道であり，真理であり，命である』と言われるお方自身でもある」（フリーマントル P.16）。

またスイスの精神病医ポール・トゥルニエが，彼のカウンセリングについて語ったこともキリストに適切に適用されるでしょう。「事実は，100人の人を表面的に調べるよりも，ひとりの人を徹底的に理解することの方が興味深いことである」（トゥルニエ P.21）。たとえそうであっても，私たちはイエスのすべてを知ることはできません。イエスの伝記作者，同時代人，友が力強く語っている通りです。

「イエスが行なわれたことは，ほかにもたくさんあるが，もしそれらをいちいち書きしるすなら，世界も，書かれた書物を入れることができまい，と私

は思う」(ヨハネ21：25)。

イエスのことを知る主な資料源は，彼についての最も権威ある作品集である聖書です。聖書を神聖なる文書として考えることは第4課のテーマです。聖書は昔も今も大変誤解されています。あるクリスチャンは，はっきり言わないまでも，神は聖書の中で人間に語られたから，人間はもはや考える必要はないという考えを暗に永く持っています。聖書を理解する上で，このようなアプローチは拒絶しなければなりません。キリスト教を真剣に考える人は，聖書が言っていることを考えなければなりません。人が聖書のメッセージに対して基本的確信や信仰をもつようになるのは，理解と熟考によるのです。信仰と理性は敵同士ではなく，実に最良の友人同士です。そこで考え深い人は，自己の信仰を何か確かなものに基礎づけたいと願いますから，第4課の目的は聖書の信頼性を確立することにあります。

聖書は単に事実を記録した書物ではありません。聖書は，真理を求め，経験によって実在を発見する喜びを知りたいと願っている者に霊感を与えます。従って，第5課は個人的宗教経験の主題を扱います。この課で実践面に入りますが，それは真理，神，イエス，聖書を単に知的観点から扱うのでなく，服従の面から扱うのが私の目的だからです。

ある日の教室で，私の哲学教授は3種類の哲学者について語りました。その話は哲学者についてでしたが，語られたことは私たちのすべてに適用できると思います。3種類の人とは，知的な人，感情的な人，意志の人のことでした。[b] 各々にはそれにふさわしい哲学があります。第1のタイプは実証主義的唯物論における理性の主権に相当します。第2のタイプは汎神論的観念論に当たり，第3のタイプはキリスト教に相当します。以上の用語の意味はおわかりにならないかもしれませんが，最後の意志の人は理解できると思います。

第五課でこれら3つの要素を正しく位置づけしますが，基本的に言ってクリ

スチャンは意志の人です。それは人間の理性や感情が，人生と宗教に何の役割ももってはいないということではありません。役割はあります。しかし，本来，私たちがキリスト教と言うとき，私たち自身の明け渡し，意志の行為を要求するものをさしているのです。

ある時，ひとりの婦人がカウンセリングを求めてポール・トゥルニエのところに来ました。子供時代からの苦痛に満ちたエピソードを話しながら，彼女はトゥルニエ博士が彼女の母親を不当にさばきはしないかと恐れました。そこで彼女は，できる限り完全に正直であろうとつとめました。トゥルニエは，彼女が語った多くの事実は忘れてしまったが，インタビュー中に感じた，彼女の心の奥底における真理に対する関心を決して忘れないだろう，と書いています。

「私は情報から交流に移りました。情報は知的なものですが，交流は霊的です。しかし情報は交流に至る道でした。情報はいろいろな人について語ります。交流はその人に触れます。情報によって私は事例を理解することができます。しかし，その人を理解することができるのは交流による以外にありません。人は私たちに事例を知ってほしいと願いますが，自分そのものを知ってほしいとも思っているのです」(トゥルニエ P.25)。

このことも，この本の私の心からなる願いです。私はある種の交流が成立し得るような仕方で話したいのです。おわかりのように，私が伝えたいのは単なる情報ではありません。もっと深いもの，霊的次元にあるもの，個人的レベルにあるもの，人間意志の潜在意識のレベルにあるものです。

エミール・ブルンナー（1899-1966）[c]は「主なる神を信じるより汎神論的哲学を持つことの方が楽である」と言いました（ベイリー P.55）[d]。あいまいな神は私たちの意志に何の主張も要求も与えず，自己を献げることを求めないからです。

ここに収められていることはチャレンジとして，すなわち読むこと，考えること，委ねることへの挑戦として提示されています。それは，「さあ，こういうものだから，受け入れるなり捨てるなりしてくれ」といった態度で提示されていません。いやまったくそうではありません。それは考えることへの招き，詩篇記者の詩的用語を用いると，「主のすばらしさを味わい，これを見つめよ」（詩篇34：8）ということへの招きとして提示されています。

ジェリー・L・サンディッジ

ルーベン，ベルギー

1977年11月

---

a　18世紀以前の学問全体は，人文科学と神学を含めフィロソフィエ（哲学）と呼ばれていた。この言葉は聖アウグスチヌスの場合がそうであったように，キリスト教の知恵の全体を意味していた。

b　これらの3つのタイプはドイツ哲学者ウィルヘルム・ディルタイ（1833-1911）によってはじめて示された。

c　エミール・ハインリッヒ・ブルンナーは改革派の伝統をもつスイスの神学者であった。彼は現代プロテスタント神学の進路を方向づけることを助けた。彼は牧師，大学教授，神学及び哲学に関する10冊以上の著者でもある。

d　ベイリーはブルンナーの『反抗する人間』より引用している。

参考文献

1．アームストロング，A. H.『古代哲学緒論』London, England: Methuen & Co, Ltd., 1965.
2．ベイリー・ジョン『巡礼への招き』London, England: Pelican Books, 1960.
3．フリーマントル，アン『信仰の時代，中世の哲学者たち』New York, USA: The New American Library, 1970.
4．ハッチンズ，ロバート，メナード『西洋世界の偉大な書物：パスカル』Chicago Illinois, USA: Encyclopedia Britannica, Inc., 1952.
5．トゥルニエ，ポール『人格の意味』London, England: SCM Press, Ltd., 1970.
6．ヴァン・ステンバーゲン，フェルナンド『西洋のアリストテレス』New York, USA: Humanities Press, 1970.